

卷三

太田和泉これを綴る

常楽寺にて相撲の事

二月廿五日御上洛、赤坂に御泊。廿六日常楽寺まで御出でなされ、御逗留。

三月三日に江州国中の相撲取を召し寄せられ、常楽寺にて相撲をとらせ、御覧候。人数の事、百濟寺の鹿、百濟寺の小鹿、たいとう、正権、長光、宮居眼左衛門、河原寺の大進、はし小僧、深尾又次郎、鯰江又一郎、青地与右衛門。此の外、随分の手取の相撲ども、我も貼と員を知らず馳せ集まる。其の時の行事は木瀬蔵春庵。

鯰江又一郎・青地与右衛門取り勝り、これに依つて、青地・鯰江召し出だされ、両人の者に慰斗付の大刀・脇差を下され、今日より御家人に召し加へられ、相撲の奉行を仰せ付けらる。両人面目の至なり。爰に深尾又次郎、能き相撲面白く仕り候て、御感なされ、御服下さる。添き次第なり。

三月五日 御上洛、上京驢庵に至つて御寄宿。畿内隣国の面々等、三州より家康公御在洛。門前市をなす事なり。

名物召し置かるゝの事

さる程に、天下に隠れたき名物、堺に在り候道具の事

天王寺屋宗及 一、菓子の絵。薬師院 一、小松島。油屋常祐 一、柑子口。松永弾正 一、鐘の絵。

何れも覚えの一種ども、召し置かれたきの趣、友閑・丹羽五郎左衛門御使にて、仰せ出ださる。違背申すべきに非ず候の間、違儀なく進上。則ち代物金銀を以て仰せ付けられ候ひき。

観世大夫・今春大夫立ち合ひに御能の事

四月十四日

公方様御構へ御普請造り畢るの御祝言として、観世大夫、今春大夫立ち合ひに御能。

一番 たまの井 観世。二番 三番 張良 観世。四番 あしかり 大蔵新三 今春。五番 松風 観世。六番 紅葉がり 大蔵新三 今春。七番 とをる 観世。
一、地謡 生駒外記・野尻清介。一、大つゝみ 伊徳高安、大蔵二介、彦三郎。
一、小つゝみ彦右衛門、日吉孫一郎、久二郎、三蔵。一、たいこ 又二郎、与左衛門。一、笛 伊藤宗十郎、春日与左衛門。

一、飛騨国司姉小路中納言卿 一、伊勢国司北畠中将卿、一、三州徳川家康卿
一、畠山殿 一、一色殿。

一、三好左京大夫。一、松永弾正。撰家・清花御衆歴々、畿内隣国の面六等群れ集まり、晴れがましき見物なり。爰に於いて、信長公御官を進められ候へと、上意侯と雖も、御辞退なされ、御請けこれなし。忝くも三献の上、公儀御酌にて、御盃を御拝領、御面目の至りなり。

越前手筒山攻め落せらるゝの事

四月廿日 信長公京都より直ちに越前へ御進発。坂本を打ち越え、其の日、和邇に御陣取。廿一日高島の内、田中が城に御泊。廿二日若州熊河、松宮玄蕃所に御陣宿。廿三日佐柿、栗屋越中が所に至りて御着陣。翌日

御逗留。廿五日越前の内敦賀表へ御人数を出ださる。信長公懸けまはし御覽じ、則ち手筒山へ御取り懸け候。彼の城、高山にて、東南峨々と聳えなり。然りと雖も、頻に攻め入るべきの旨、御下知の間、既に一命を軽んじ粉骨の御忠節を励まれ、程なく攻め入り、頸数千参百七十討ち捕り、並びに金ヶ崎の城に、朝倉中務大輔楯籠り候。翌日、又、取り懸け、攻め干さるべきのところ、色々降参致し、退出候。引壇の城、是れ又、明け退き候。則ち、滝川喜右衛門、山田左衛門尉兩人差し遣はされ、堀・矢蔵引き下ろし、破却させ、木目峠打ち越え、国中御乱入なすべきのところ、江北浅井備前、手の反覆の由、追々、其の注進候。然れども、浅井は歴然御縁者たるの上、剩へ、江北一円に仰せ付けらるるの間、不足あるべ

からざるの条、虚説たるべしと、おぼしめし候ところ、方々より事実の注進侯。是非に及ばざるの由にて、金ヶ崎の城には、木下藤吉郎残しをかせられ、

四月晦日 朽木越えをさせられ、朽木信濃守馳走申し、京都に至つて御人数打ち納められ、是れより、明智十兵衛、丹羽五郎左衛門兩人、若州へ差し遣はされ、武藤上野人質執り候て参るべきの旨、御錠侯。則ち、武藤上野守母儀を人質として召し置き、其の上、武藤構へ破却させ、

五月六日 はりはた越えにて罷り上り、右の様子言上侯。然る間、江州路次通りの御警固として、稲葉伊予父子三人、斎藤内蔵之佐、江州守山の町に置かれ候ところ、既に一揆蜂起せしめ、へそ村に煙あがり、守山の町南の口より焼き入りしこと、稲葉緒口を支え、追ひ崩し、数多切り捨て、手前の働き比類なし。さて、京表面々等の人質執り固め、公方様へ御進上なされ、天下御大事これあるに於いては、時日移さず御入洛あるべきの旨、仰せ上げらる。五月九日御下、志賀の城・宇佐山拵へ、森三左衛門をかせられ、

十二日に永原まで御出で、永原に、佐久間右衛門置かれ、長光寺に、柴田修理亮在城。安土城に、中川八郎右衛門楯籠る。此の如く塞々に御人数残しをかせられ、

千草峠にて鏡炮打ち申すの事

五月十九日御下のところ、浅井備前、総江の城へ人数を入れ、市原の郷一揆を催し、通路を止むべき行仕候。然れども、日野蒲生右兵衛門大輔、布施藤九郎、香津畑の菅六左衛門馳走申し、千草越えにて御下なされ候。左候ところ、杉谷善住坊と申す者、佐々木左京大夫承禎に憑まれ、千草・山中道筋に鉄炮を相構へ、情なく、十二、三日隔て、信長公を差し付け、二つ玉にて打ち申し候。されども、天道昭覧にて、御身に少しづゝ打ちかすり、鰐の口を御遁れ候て、目出たく五月廿一日濃州岐阜御帰陣。

落窪合戦の事

六月四日 佐々木承禎父子、江州南郡所々に一揆を催し、野洲川表へ人数を出だし、柴田修理・佐久間右衛門懸け向かひ、やす川にて足輕に引き付け、落窪の郷にて取合ひ、一戦に及び、切り崩し、討ち取りし頸の注文。三雲父子、高野瀬、水原、伊賀甲賀衆究竟の侍七百八十討ちとり、江州過半相静まる。

たけくらべ・かりやす取出の事

さる程に、浅井備前、越前衆を呼び越し、たけくらべ・かりやす、両所に要害を構へ候。信長公御調略を以つて、堀・樋口御忠節仕るべき旨御請なり。

六月十九日 信長公御馬を出だされ、堀・樋口謀叛の由承り、たけくらべ、かりやす、取る物も取り敢えず退散なり。たけくらべに一両日御逗留なさる。

六月廿一日 浅井居城小谷へ取り寄せ、森三左衛門、坂井右近、斎藤新五、市橋九郎右衛門、佐藤六左衛門、塚本小大膳、不破河内、丸毛兵庫頭、雲雀山へ取り上げ、町を焼き払ふ。信長公は、諸勢を召し列れられ、虎後前山へ御上りなされ、一夜御陣を居えさせられ、柴田修理、佐久間右衛門、蜂屋兵庫頭、木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門、江州衆に仰せ付けられ、在々所々、谷々入々まで放火候なり。

あね川合戦の事

六月廿二日、御馬を納められ、殿に諸手の鉄炮五百挺、并に御弓の衆三十計り相加へられ、築田左衛門太郎、中条将監、佐々内蔵介両三人御奉行として相添へられ候。敵の足軽近々と引き付け、築田左衛門太郎は中筋より少し左へ付きて、のがれ候。乱れ懸かつて、引き付け候を、歸し合ひ貼、散々に暫し戦ふ。太田孫右衛門頸をとり、罷り退かれ、御褒美斜ならず。一番に佐々内蔵介手へ引き付け、八相山・宮の後にて取り合ひ、爰にても蔵介高名致し、罷り退く。三番八相山下られ、橋の上にて取合ひ、中条将監疵を被る。中条又兵衛橋の上にてたゞき合ひ、双方、橋より落ちて、中条又兵衛堀底にて頸をとり、高名比類なき働きなり。御

弓の衆として相支へ、異儀なく罷り退く。其の目は、やたかの下に野陣を懸けさせられ、よこ山の城、高坂・三田村・野村肥後楯籠り、相拘へ侯。廿四日に四方より取り詰め、信長公は、たつがはなに御陣取り、家康公も御出陣侯て、同じ龍が鼻に御陣取る。

然るところ、朝倉孫三郎、後巻として八千ばかりにて罷り立つ。大谷の東、をより山と申し侯て、東西へ長き山あり。彼の山に陣取るなり。同浅井備前人数五千ばかり相加はり、都合一万三千の人数。六月廿七日の暁、陣払ひ仕り、罷り退き侯と存じ侯のところ、廿八日未明に三十町ばかりかゝり来なり、姉川を前にあて、野村の郷・三田村両郷へ移り、二手に備へ侯。西は三田村口、一番合戦、家康公むかはせられ、東は野村の郷、そなへの手へ信長御馬廻、又、東は美濃三人衆諸手一度に諸合す。

六月廿八日 卯刻、巳寅へむかつて御一戦に及ぼる。御敵もあね川へ懸かり合ひ、推しつ返しつ、散々に入りみだれ、黒煙立て、しのぎをけづり、鏑をわり、爰かしこにて、思ひ貼の働きあり。終に追ひ崩し、手前に於いて討ち取る頸の注文、真柄十郎左衛門、此の頸、青木所左衛門是れを討ちとる。前波新八、前波新太郎、小林端周軒、魚住龍文寺、黒坂備中、弓削六郎左衛門、今村掃部助、遠藤喜右衛門、此の頸、竹中久作是れを討ちとる。兼ねて此の首を取るべしと高言あり。浅井雅楽助、浅井斎、狩野次郎左衛門、狩野三郎兵衛、細江左馬介、早崎吉兵衛、此の外、宗徒は千百余討ち捕る。大谷まで五十町追ひ討ち、麓を御放火。

然りと雖も、大谷は高山節所の地に侯間、一旦に攻め上げ侯事なり難くおぼしめされ、横山へ御人数打ち返し、勿論、横山の城降参致し、退出し、木下藤吉郎、定番として横山に入れおかる。夫れより佐和山の城、磯野丹波守楯籠り、相拘へ侯へき。直ちに信長公、七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、取り詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰せつけらる。

丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取り詰めさせ、諸口の通路をとめ、同七月六日、御馬廻ばかり召し列れられ、御上洛。公方様へ当表の様子仰せ上げられ、天下諸色仰せつけらる。七月八日、岐阜に至つて御馬を納められ侯へき。

野田福島御陣の事

八月廿日、南方表御出勢。其の日は横山に御陣を懸けさせられ、次の日、御逗留。廿二日、長光寺御泊り。廿三日、下京本能寺御陣宿。翌日、御逗留。廿五日、南方へ御働き、淀川をこさせられ、比良かたの寺内に御陣取。廿六日、御敵楯籠る野田・福島へ成らる。御手遣り、先陣は近陣に陣どらせ、天満森・川口・渡辺・神崎・上難波・下難波・浜の手まで陣どらせ、信長公は天王寺に御居陣なり。然れども、大坂・堺・尼崎・西宮・兵庫辺より、異国・本朝の珍物を捧げ、御礼申さるゝ仁、御陣取り、見物の者群集をなす事に侯。

御敵、南方諸牢人大將分の事。細川六郎殿、三好日向守、三好山城守、安宅、十河、篠原、岩成、松山、香西、三好為三、龍興、永井隼人、此の如き衆八千ばかり野田・福島に楯籠りこれある由に候。さる程に、三好為三・香西兩人は、御身方に調略に参じ仕るべきの旨、粗申し合せられ候と雖も、近陣に用心きびしく、なりがたく存知す。

八月廿八日夜中に、為三・香西天王寺へ参らせられ候。九月三日、摂津国中島、細川典廠城まで、公方様御動座。同八日に、大坂十町ばかり西に、ろづの岸と云ふ所、御取出に仰せ付けらる。斎藤新五、稲葉伊予、中川八郎右衛門両三人入れおかる。並びに、大坂の川向ひに、川口と申す在所候を、是れ又、拵へ、平手監物、平手甚左衛門、長谷川与次、水野監物、佐々蔵介、塚本小大膳、丹羽源六、佐藤六左衛門、梶原平二郎、高宮右京亮、置かせらる。

九月九日、信長公、天満ヶ森へ御大将陣を寄せさせられ、次の日、諸手より、うめ草をよせ、御敵城近辺にこれある江堀を填めさせられ、

九月十二日、野田・福島 of 十町ばかり北に、えび江と申す在所候。公方様・信長公、御一所に詰め陣に御陣を居えさせられ、先陣は、勿論、夜貼に土手を築き、其の手貼を争ひ、塀際へ詰めよせ、其の数を尽し、域楼を上げ、大鉄炮にて城中へ打ち入れ、責められ候。根来・雑賀・湯川・紀伊国奥郡衆二万ばかり罷り立ち、遠里小野・住吉・天王寺に陣取り候。鉄炮三千挺これある由に候。毎日参陣候て、攻められ候。御敵身方の鉄炮、誠に日夜天地も響くばかりに候。然らば、野田・

福島種々懇望致し、無事の儀申し扱ひ候と雖も、逆も程あるべからざるの間、攻め干さるべきの由候て、御許容これなく、野田・福島落去候はば大坂滅亡の儀と存知候歟。

九月十三日夜中に手を出し、ろうの岸・川口両所の御取出へ大坂より鉄炮を打ち入れ、一揆蜂起候と雖も、異なる子細なく候。翌日十四日に大坂より天満ヶ森へ人数を出だして、則ち懸り合ひ、川を追ひ越し、かすが井堤にて取り合ひ、一番に佐々蔵介懸け向かひ、相戦ひて、疵を被り、罷り退かる。二番に堤通中筋を前田又左衛門かゝり合ひ、右手は弓にて申野又兵衛、左は野村越中・湯浅甚介・毛利河内・金松又四郎、先を争ひ、散々に相戦ひ、扣き立て、毛利河内と金松又四郎兩人して下間丹後内の長末新七郎をつき臥せ、毛利河内、金松に頸を取り候へと、申されなり。其の時、金松申す様に、某は手伝ひにて候間、河内に頸を取り候へと申し、僉儀にて、あたら頸一ツ取らずして、罷り退かる。爰にて野村越中討死なり。

志賀御陣の事

(辛未)九月十六日越前の朝倉・浅井備前、三万ばかり坂本口へ相働くなり。森三左衛門、宇佐山の坂を下々懸け向かひ、坂本の町はづれにて取り合ひ、纒千の内にて足輕合戦に少々頸を取り、勝利を得。翌日、

九月十九日、浅井・朝倉両手に備へ、又取り懸かり候。町を破らせ候ては無念と存知せられ、相拘へられ候のところ、大軍両手より焔とかゝり来なり、手前に於いて粉骨を尽さると雖も、御敵猛勢にて、相叶はず、火花を散らし、終に鎧下にて討死。森三左衛門、織田九郎、青地駿河守、尾藤源内、尾藤又八。道家清十郎、道家功十郎とて、兄弟覚えの者あり。生国尾張守山の住人なり。一年、東美濃高野口へ武田信玄相働き候、其の時、森三左衛門、肥田玄蕃先懸けにて、山中・谷合ひにてかゝり合ひ、相戦ひて、兄弟して頸三つ取りて参り、信長公の御目に懸け候へば、御褒美斜めならず、白きはたをさし物に仕り候。其の旗をめしよせられ、天下一の勇士なりと、御自筆に遊ばしつけられ候て下さる。都鄙の面目これにすぐべからず、名誉の仁にて候なり。今度も其の旗をさして、森三左衛門と一所に候て前後手柄を尽し、火花を散らし、枕を並べて討死候ひしなり。宇佐山の城、端城まで攻め上り、放火候と雖も、武藤五郎右衛門、肥田彦左衛門兩人これありて、堅固に相抱へ候。

九月廿日 御敵相働き、大津馬場、松本を放火し、廿一日、逢坂をこへ、醍醐・山科を焼き払ひ、既に京近く罷りなり、二十二日、摂津国中島へ其の注進に候。京中へ乱入候ては曲なくおぼしめさる。

九月廿三日 野田・福島御引き払ひ、和田伊賀守・柴田修理亮兩人殿に仰せつけられ、路次は中島より江口通り御越しなり。彼の江口と申す川は、淀・宇治川の流れにて、大河漲り下り、滝鳴つて、冷じき様体なり。総じて、昔年より舟渡

しにて侯なり。猛勢の御人数差し懸け侯ところ、一揆蜂起し、渡舟を隠しおき、通路自由ならず。稲麻・竹葦たんの如く、遇半竹鎧を持つて、江口川の向ひを大坂堤へ付きて、叫喚すると雖も、異事なし。信長公川の上下懸けまはし御覽じ、馬を打ち入れ、川を渡るべきの旨、御下知の間、悉く乗り入れ侯ところ、思ひの外、川浅く侯て、かち渡りに雑兵難なく打ち越し侯。

九月廿三日 公方様供奉なされ、御帰洛。次の日より江口の渡り、かちわなりには中々ならず侯。爰を以て、江口近辺の上下万民の者、奇特不思議の思ひをなす事なり。

九月廿四日 信長公、城都本能寺を御立ちたされ、逢坂を越え、越前衆に向ひて御働き。旗がしらを見申し、下坂本に陣取りこれある越北衆、癩軍の為体にて、叡山へ逃げ上り、はちヶ峰・あほ山・つぼ笠山に陣取り侯。此の時、山門の僧衆十人ばかり召し寄せられ、今度、信長公の御身方忠節申すに付きては、御分国中にこれある山門領、元の如く還附せらるべきの旨、御金打侯て、仰せ聞かせらる。併し、出家の道理にて、一途の鼻肩なりがたきに於いては、見除仕り侯へと、事を分ちて仰せ聞かせらる。其の上、稲葉伊予に仰せつけられ、御朱印調へさせ、遣はさる。御錠には、若し此の両条違背に付きては、根本中堂・三王廿一社を初め奉り、焼き払はるべきの旨、上意侯ひき。然りと雖も、重ねて、山門の僧衆、兎角を申し上げず、時刻到来侯て、浅井・朝倉に鼻肩せしめ、魚鳥女人などまで上させ、ほしいままの悪逆なり。信長公、其の日は、下坂本に御陣取り侯て、廿

五日、叡山の麓を取りまかせ、香取屋敷丈夫に拵へ、平手監物、長谷川丹波守、山田三左衛門、不破河内守、丸毛兵庫頭、浅井新八、丹羽源六、水野大膳、此等をかせられ、穴太が在所、是れ又、御要害仰せつけらる。築田左衛門太郎、川尻与兵衛、佐々蔵介、塚本小大膳、明智十兵衛、苗木久兵衛、村井民部、佐久間右衛門、進藤山城守、後藤喜三郎、多賀新左衛門、梶原平次郎、永井雅楽助、種田助丞、佐藤六左衛門、中条将監、十六首おかる。其の次、田中に柴田修理亮、氏家卜全、安東伊賀守、稲葉伊予守陣とらせ、唐崎拵、佐治八郎、津田太郎左衛門をかせられ、信長公志賀の城宇佐山に御居陣なり。叡山西の麓古城勝軍拵へ、津田三郎五郎、三好為三、香西越後守、公方衆相加へ、二千ばかり在城なり。屋瀬、小原口には山本对馬守、蓮養、足懸りを構へ陣取り、彼の両人案内者の事に候へば、夜々に山上へ忍び入り、谷々寺々焼き崩し候の間、難堪致すの由候なり。

十月廿日、朝倉かたへ使者を立てられ、互ひに年月を経、入らざる事に候間、一戦を以て相果さるべく候。日限をさし罷り出でられ候へと、菅屋九右衛門を以て仰せ遣はされ候と雖も、中々返答に及ぼず、結句、朝倉筋力を抛ち、無事を扱ひ候と雖も、是非とも御一戦の上にて御鬱憤を散ぜらるべき旨にて、御許容これなし。南方三好三人衆の事、野田・福島の普請を改め、諸牢人、河内・摂津国端貼打ち廻し致すと雖も、高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫・片野に安見右近、伊丹・塩河・茨城・高槻、何れも城貼堅固に相抱え、其上、五畿内の衆塞貼陣取り候の間、京口への行。中貼及びなき儀に候。又、江南表の儀、佐々木左京大

夫承禎父子、甲賀口、三雲居城、菩提寺と云ふ城まで罷り出でられ候へども、人数これなく候て、手合せの体ならず候。江州にこれある大坂門家の者、一揆をおこし、尾濃の通路止むべき行仕り候へども・百姓などの儀に候間、物の数にて員ならず、木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門、在々所々を打ち廻り、一揆ども切り捨て、大方相静まる。君の御大事、此の節と存知、大谷へ差し向かひ候。横山の城御敵佐和山へ差し向かひ候。御取出、百々屋敷に人数丈夫に残しおく。木下藤吉郎・丹羽五郎左衛門兩人志賀へ罷り越され候ところ、一揆ども建部郷内に足懸かりを拵え、箕作山・観音寺山へ取り上り、両手より差し合ひ、通路取り切り候。爰に見合ひ、一戦に及ぶ。先武者数輩切り捨て、異儀なく罷り通り、兩人志賀へ打ち越され、勢田の郷中へ懸け入られ候のところ、信長公志賀の御城より御覽じ、さては、山岡美作守、佐々木承禎を引き入れ、謀叛相構へ候かと、御不審におぼしめし候ところ、飛脚を以て、藤吉郎・五郎左衛門、是れまで参陣仕り候と、言上候ところ、御機嫌斜ならず、諸陣も焜と競ひ申し候ひしなり。

霜月十六日、丹羽五郎左衛門御奉行として仰せつけられ、錘綱丈夫にうたせ、熱田に舟橋懸けさせられ、往還輒様に、村井新四郎・埴原新右衛門御警固として、置かせられ、信長公の御舎弟織田彦七、尾州の内こきゑ村に足懸かり拵へ、御居域のところ、志賀御陣に御手塞ぎの様体見及び申し、長島より一揆蜂起せしめ、取り懸かり、日を逐つて、攻め申し候。既に城内へ攻め込みしなり。一揆の手にかゝり候ては御無念とおぼしめし、御天主へ御上り候て、

霜月廿一日、織田彦七御腹めされ、是非たき題目なり。

霜月廿二日、佐々木承禎と御和睦なさる。三雲・三上、志賀へ出仕申し、上下満足候ひしなり。

霜月廿五日、堅田の猪飼野甚介・馬場孫次郎・居初又次郎、両三人申し合せ、御身方の御忠節仕るべきの由侯て、坂井右近・安藤右衛門・桑原平兵衛、右の趣申し越し、上意を得られ、人質を請げ取り、其の夜中に、人数千ばかりにて堅田へ中入り仕り候ところ、越前衆、時刻移り侯て、かたはじと存知、多勢を以て口貼へ攻め込むなり。爰かしこへ差し向かひ、前波藤右衛門・堀平右衛門、義景右筆の中村左丞、其の外、宗徒の者数多討ち捕ると雖も、或は手負ひ、或は討死し、次第貼、無人になり、既に落去侯。坂井右近・浦野源八父子、一人当千の働き、高名比類なきところ、寒天と云ひ、深雪と云ひ、北国の通路続けがたき故に侯歟、公方様へ、朝倉、色貼難じ申すに付いて、無為の儀、仰せ出だされ侯。信長公御同心これなきところに、

霜月晦日、三井寺まで公方様御成りて、頻に上意侯事に候間、黙止しがたくおぼしめさる。

十二月十三日、御和談相究む。併、水うみ越えさせられ、勢田辺まで御人数引き退かれ、其の上、高島まで人質御下し侯はでは、罷り退き侯事迷惑の由申さるゝに付いて、十四日に湖水打ち越し、勢田、山岡美作所まで御人数引き退かる。さて、十五日早朝より叡山を引き下し、罷り退かる。勿論に侯と雖も、是に併せて、

一戦御名誉となすの故なり。同十六日、大雪中を凌ぎ御帰陣。佐和山の麓礒の郷に御泊。十二月十七日、岐阜に至りて御帰陣。珍重々々。